

最高裁よもやま話—裁判所は改革中

藤井 龍子氏

「最高裁という変なところに8年4か月いた。(その間、自分が)世の中の役にたったのか検証してほしい」ー。元最高裁判事で、再び労ペンに加入した藤井龍子さんは、こう始めた。11月22日。狭い事務所の机を取り払い、29人が聞き入ったが、人口密度濃密、話の内容も深く濃い、あつという間の110分だった。



最高裁といえば、石造りのいかめしい建物で、一般人を拒んでいる感さえするが、藤井さんは気さくに、この石の城を解説した。判事は15人。三つの小法廷を5人ずつで構成し、ひとつの小法廷は年間2000件も扱うという。朝9時半から午後5時まで、裁判官室で資料とにらめっこ。おかげで、目が悪くなり、眼鏡をかけるようになったとか。

裁判所が扱う訴訟は、社会の変化を直に反映し、家事事件だけが5年間で20万件近く増加。相続や離婚などの家族関係の悪化だけでなく、民法が科学技術の進歩に追いついていない側面もあるという。藤井さんの発案で、判決本文に、説明もつけるようにしたのを契機に、傍聴者サービスも始まった。石の城は国民に目を向けた改革を始めているという。「女性裁判官の採用状況は」など、質問も活発だった。

だが、残念ながら参加者のうち女性はゼロ。全国の裁判官3000人のうち、女性は20%を超えるというが、この日の女性は講演者ただ一人。残念だった。(植木隆司)